羅針盤
KANSAI GAIDAI KYOSHOKU JOURNAL
教職を目ざす学生・卒業生のために
COMPASS
第 109 号 2015. 7.11 (土)発行
関西外国語大学
教職教育センター
SCET

「教員採用試験を前に」

短期大学部准教授　堅田利明

いま皆さんは、試験対策に本腰を入れ、計画実行の真っただ中にいることと想います。地道に階段を登っていくことは、どれだけ不安でつらい作業でしょうか。それを日々実践されているのです。気候変動の大きいこの時期、順調に進んできた計画がふとしたことで停滞したり、以前のようなやる気が起こらなくなったり、そうした事態に遭遇されているかもしれません。「受験する都道府県の教育施策やその流れを把握しておく。」「自分のことばで経験を語れるように面接の準備をしておくと良い。」分かってはいながら焦ってばかりで一向に前進出来ていないという人もいるでしょう。本気で取り組めば取り組むほど、否応なしに自身の感情と向き合う状況が生まれてきます。そう、自身の中にあるさまざまな感情に気づかされます。「頑張れている私」「頑張れない私」、都合の良い「一部の私」だけを優遇・賞賛し、その他を非難・無視するような見方は、ギクシャクした感情を増幅させてしまうことにもなります。どれも平等に価値ある感情として捉えていかれることをお勧めします。自らをエンパワメントするための原動力になるはずです。いま求められている教師は、協働できること、学び続けること、そしてチームの一員として役割が果たせることです。自身の中にあるさまざまな感情とチームを組んで進んでいかれることを願います。あともう一歩です。

教育実習を終えての感想

５月から６月にかけて多くの学生が教育実習へ臨みました。彼らの経験は、卒業後の教員生活に大きく役立つとともに、これから教育実習に臨む学生にも参考になる情報にあふれています。今年度、教育実習に臨んだ学生の感想です。

瀬渡　直さん

（外国語学部英米語学科 4 年生）

私は兵庫県立八鹿高等学校で三週間の教育実習を終えました。授業の準備や生徒とのコミュニケーションをとるなど慣れないことが多く大変でしたが、とても楽しい三週間を過ごすことが出来ました。教育実習を終え、たくさん学んだことはありますが、特に私は自分の英語力や指導力を向上させることが大切と学びました。授業を実際に行ってみて、生徒が分かりやすいと感じる授業をするのがいかに難しいか、また自分が思っている以上に授業がうまくいかないということを痛感しました。自分では教材研究や授業準備をしっかりしていると思っていても、実際に教壇に立つと緊張もあり、うまく進まなかったり逆に予定より早く進んで何をしようか悩んだりするということもありました。教員になった際には教材研究と授業計画をしっかり行い、生徒が英語に触れる機会を持ち、なおかつ生徒に分かりやすく、楽しいと思ってもらえるような授業をしたいです。英語力に関してですが、文法を教えるときに完了形や助動詞の用法などで自分の知らないことがいくつかあり、また生徒から質問されることもよくありました。この経験から、もっと自分の英語力や知識を高め、身につけていかなければならないと感じました。そのためにも、卒業までに英語力を高めていきたいです。

この三週間の教育実習で学校では学べないことを学ぶことが出来ました。この経験を今後に活かし、教員採用試験に臨んでいきたいと思います。

小野　詩歩さん

（外国語学部英米語学科 4 年生）

中学校で三週間の教育実習を行ってきました。期待半分、不安半分で臨んだ教育実習、実際の教育現場から様々なことを学び、教員になりたいという気持ちをより一層強める三週間だったように思います。その期間の中で、良かった点と改善すべき点を 1 点ずつ述べたいと思います。

まず良かった点として、三週間という短い期間で、担当させていただいた 1 年生はもちろんのこと、他学年の生徒ともたくさんかかわることができたことです。教育実習期間中、学校行事が多くあったこともあり、授業外の生徒の様子を見ることができました。勉強が好きではない生徒でも、部活動で頑張っていたりする姿を見て、生徒の個性を生かすためにできることは山のようにあるということに改めて気づくことができました。いかに生徒のために動けるか、しっかり考えていきたいなと思います。

次に改善すべき点としては、自分の視野の狭さです。生徒の前に立って授業を行うときや、授

業外で生徒と接するとき、全体を見渡して把握するということがなかなかできませんでした。特に、授業の際に前列の端に座っている子をなかなか見ることができず、一生懸命授業に参加してくれているのに声をかけることができなかったことを後悔しています。授業外でも、多くの生徒と話がしたいと思っていたにもかかわらず、「自ら話しかけてくれる子」に偏ってしまったように感じました。これからは、視野を広くもち生徒一人ひとりを見られるようになりたいです。

他にも、学んだことはたくさんありました。今回、教育の現場から学ばせていただいたことを自分の力にし、教員採用試験に臨もうと思います。

二宮　瑞葵さん

（国際言語学部国際言語コミュニケーション学科 4 年生）

教育実習を終えて、私は今までより更に、「教師に絶対なりたい」とモチベーションを高めることができました。たくさんのことを学び、生徒とともに感動することができたからだと思います。教育実習で学んだことや、感動したことについて述べます。

まず、この経験を通じて学んだことが三点あります。一点目は、専門性はもちろんですが、「英語を教えるときは教師が英語を楽しいと思って教える」ということの大切さを学びました。この言葉は、私が高校生の時に数学を教えてくださっていた先生が授業見学に来てくださった際にいただきました。私は授業を一生懸命教えて、アクティビティもうまくいくようにと必死になってしまっていました。しかし、一人でも多くの生徒を英語好きにさせたいのであれば、少なくとも教師が英語が好きで楽しいという気持ちが大切だということを学びました。二点目は、「何事も謙虚に学び続けること」の大切さです。英語の専門性を上げるためにもっとこれからも学び続けることが大切だと思いましたが、先輩の教師の方々にたくさん指導法についての助言をいただき、自分を客観的に見ることができ、すごく勉強になりました。学び続けることで、教師のやりたい授業ではなく、生徒のための授業を行うことができると思いました。そして、三点目は、「教えるのではなく、一緒に活動する」ことです。その中で、生徒が出来ていることやがんばっていることを褒めることで生徒との信頼関係を築くことができ、さらに生徒のモチベーションも高めることができると思います。

私は教育実習の間、体育祭の応援練習に毎日参加したり、様々な部活動にも参加し、生徒とともに汗を流して活動してきました。そうすることで、生徒が授業以外でどんなことをがんばっているのかを知ることができ、たくさんの生徒を褒めることができました。初めは授業を聞いてくれなかった生徒も、しっかりと授業を受けて私が話すことにうなずいてくれるようになりました。私はこの時、生徒との間に信頼関係を築くことができたのではないかと、うれしくなりました。短期間で、信頼関係を築くことは難しいですが、生徒のモチベーションを高めることは絶対にできると思いました。これら三点のことを教育実習を通して学ぶことが出来ました。教員になった際にもこの気持ちを忘れずに頑張りたいという自分のモチベーションにもなりました。そして、

生徒との感動体験をたくさん得ることができました。体育祭では、今まで応援団練習してきた生徒たちの晴れ姿や、雨の中一生懸命声を出して頑張る姿を見て、感動して泣いてしまいました。そして終わった後に生徒たちが泣きながら私に、「うまくできなかった」と言ってきたので、「みんなの頑張りで元気が出た人はたくさんいるし、先生は実際にみんなすごくかっこよくて感動したよ」と伝えると、笑顔で「ありがとう」と言っていました。私はその笑顔を今も忘れることができません。そして、担当のクラスでは、誕生日の際にみんなで計画してサプライズで大きな声で歌ってくれたり、最後の日には花と色紙を私にくれました。私はこんなにも生徒が心を開いてくれて、準備してくれたことがすごくうれしくて感動しました。そして最後の日に、私は一人ひとりに手紙を書き、感謝の気持ちと一人ひとりの良いところを伝えました。すると、中には泣いてくれる生徒や、最後までたくさん話してくれる生徒がいて私は、ずっとこの子たちの成長をみたいと思いました。この教育実習は毎日が感動でした。この感動は私の宝物となりました。

この教育実習は、自分がこれからなる教師としての原点であり、この時感動した気持ちを忘れずにモチベーションを高め続けたいと思います。しんどいことや。失敗したこともありましたが、生徒の成長を間近で見ることができる教師は本当に素晴らしい仕事だと思いました。絶対に教師になって、より多くの生徒と関わり、モチベーションを高められるような教員になりたいです。

高岡　尚真さん

（国際言語学部国際言語コミュニケーション学科 4 年生）

６月１日～１９日まで教育実習に行ってきました。その実習を通して自分が感じたことを伝えられたらと思います。

最初に感じたことは、今の子どもたちの現状です。私は中学二年生の担当だったのですが、その第一印象は「パワフルだなー」ということでした。実習初日は、一年生が宿泊学習、三年生が修学旅行に行っていたため、学校には二年生しかいませんでした。それでも、学校には活気があふれ、自分の担当したクラスでもそれは変わりませんでした。

一週目は主に授業見学に時間を費やしました。英語以外の授業も見学させてもらい、なぜこのタイミングで発問したのか、この生徒に発問したのには理由があるのか、など常に感じたことをメモし、その都度先生に質問しました。また学級経営に関しても、様々なことを学びました。自分の指導教諭は、クラスに対しての学級通信を毎日書いていました。後で話を聞くと、授業以外でもどんどんクラスに様々なことを還元していきたい、と話されていました。学級はこういった視点から見ることもできるのだと感じました。また、学級通信に毎日一人ずつ、私が見つけた生徒の良いところを書いていくコーナーを設けてくださいました。これは今でもさせてもらえて良かったな、と思っているところの一つです。この作業によって、クラスの子どもたち一人ひとりを意識することにも繋がったし、子どもたちと話す機会にもつながりました。自分が教員になっ

てクラスを担任したら試したいことの一つです。

二週目は、実際に授業をさせてもらいました。正直、驚きの連続でした。今振り返っても、自分が考えていたような授業をできたことは一度もありません。自分が目の前で見る子どもたちは、反面教師のようでした。

楽しくない、分かりにくいと感じたら寝るか他の作業をしたり、ノートを取っているように見えても宿題をしている、といったような自分の気持ちに良くも悪くも正直な生徒ばかりでした。子どもたちを前にして自分の表情が暗くなっているな、と自分で思うときもありました。しかし、そのたびに指導教諭の方が毎回適切なアドバイスをくださいました。毎回の授業につき、用紙三枚はびっしりと改善点や良かったことを書いてくれました。また、その改善点を取り入れて授業をすると、子どもたちの反応は変わります。班活動の際に、姿勢はうつ伏せながらも班と協力して意見を出し合ったり、発問や声掛けを少し変えるだけで、手を挙げる生徒がすごく増えたりしました。教員の工夫次第でいくらでも生徒は変わることができる、ということを身をもって実感しました。

三週目には、研究授業がありました。自分が今まで学んできたことを全て出し切りました。単元が Speaking の授業だったということもあり、みんなが声を出してくれるか、話そうとしてくれるか、などの不安もありました。ペアで練習する際には男女ペアで大丈夫か心配もありました。しかし、その予想はいい意味で外れ、音読練習はクラスみんなで声を出し、お互いに協力し合っていました。そのクラスは指導教諭のクラスだったので、自分も学活などをしていたのですが、そのクラスと積極的に関わる姿勢が子どもたちとの信頼関係につながったのだと指導教諭から話してもらいました。最後の学活の時には、クラス全員からのメッセージ付きのアルバムをもらいました。今でも見返すことがあるぐらい自分にとって大きな財産です。

教育実習を通して、教員というのは改めて素晴らしい仕事だと感じるようになりました。もちろん、良いことばかりではありませんでした。苦労もたくさんありました。しかし、常に全力で挑んだ結果、子どもたちの成長や笑顔といった大きな感動が返ってきました。全力で教育実習に臨んで本当に良かったと思います。この経験を胸に、これからも全力を尽くしていきます。

教員採用試験本番！

７月に入り、教員採用試験が始まりました。いよいよ、今年度の教員採用試験本番です。限られた時間を有効に活用し、精一杯努力し、多くの皆さんが合格を勝ち取ってもらいたいと思います。今年度、教員採用試験を受験する学生の意気込みを紹介します。

勘田　菜香さん

（外国語学部英米語学科 4 年生）

私は留学から 5 月中旬に帰国しました。帰国してから始めの頃は、「教員採用試験を今年度に受ける」という自覚はありませんでした。しかし、周りにいる友達が一生懸命、採用試験に向けて勉強している姿を見ていると「私も頑張らないと！」という気持ちになりました。そして、そこで思いついた事が、留学から帰ってきた人を集めてゼミを作ろうということでした。それから友達に声をかけて出来上がったグループが「合格アルパカ」というグループです。グループで面接練習を始めた頃は、人から指摘をされることを嫌に思うようになり、毎日練習に行くことが苦痛になっていました。しかし、仲間がある日、私にアドバイスをしてくれました。それは、「指摘を受けてそれを直していけることは、とてもありがたいことだ」ということでした。その助言を仲間からもらえて私はとてもうれしく感じ、「頑張ろう！」という気持ちになりました。そして、今では別のグループとも合流し、合計 25 人ほどで面接練習をしています。1 限目から始める練習では、眠たい中みんな集まってお互いに切磋琢磨しながら練習をしています。とても勉強にもなりますし、すごく楽しいです。いつもミスをしてしまいますが、ミスからたくさんのことを学ぶことができます。そして、このように練習をしてつくづく感じることは、やはり「人とのつながり、一人では教員採用試験に挑めない」ということです。私は、人に関わることが得意ではなく、できることはすべて一人でやりたいと思う人間なのですが、先生がおっしゃられたように面接練習だけは一人ではできない、仲間の力が必要であるということを改めて痛感しました。また、一人で勉強するよりも人が集まって勉強していく方が団結力であったり、「みんなで合格しよう！」という思いが強まるということにも気が付きました。面接練習に時間を取りすぎてしまい、教職教養の対策について不安がありますが、みんな同じ状況ですので、最後まで気を引き締めて諦めずにみんなと頑張っていきたいです。そして、今、共にいる仲間や今まで私たちを見守り育ててきてくれた先生方や教職教育センターの方々に感謝の気持ちを持ち、全員で合格できるよう、最後まで走り続けていきます。

Learn from yesterday,
Live for today,
Hope for tomorrow.
The important thing is not to stop questioning.

Albert Einstein

藤井　大誠さん

（外国語学部英米語学科 4 年生）

まだまだ先だと感じていた教員採用試験まで残り２週間となりました。毎日思うことは、教員採用試験を受けようとともに頑張っている仲間のありがたさです。多忙な中でも毎日決まって時間をつくり、短い時間を有意義に過ごせています。彼らと一緒に日々頑張っているとたくさんのことに気付かされます。自分が思いもしなかったするどい意見、効率的な勉強方法、各々の人間性等、あげるときりがありませんが、特に教育に対する考えは、みんな本当に面白い考えを持っています。将来、同じ職場で英語教員として働ければどんなに楽しいかと自分は思いながら共に準備を進めています。毎週、火・水・木曜日は、岡澤先生、明石先生、角野先生に夜スペを開いていただき、約９０分の面接対策を行っています。決められた時間内で自分の意見を述べることは思っていたよりも難しく、うまく自分の意見が言えたと思うと、次は論点がくずれていたり、癖が出てきたりと、なかなか納得のいくものになりません。しかし、毎日継続して意識することで、当初に比べて自信が出てきたことを実感しています。どれだけ毎日コツコツと集中するかが大切だと気付きました。現状に満足し、勉強したつもりや準備したつもりでいたら足元をすくわれると思いますので、気を引き締めて残りの日々を過ごしたいと思います。

教員採用試験の本番では、短い時間で自分を理解し見てもらう必要があります。緊張し、焦っても本当の自分は伝わりません。うまく自分を伝えようと頑張るのではなく、楽しむことを目標に臨みたいと思います。教壇に立った際に、生徒を目の前にして緊張して何も話せない教師なんていないと思います。自分が出会った尊敬する先生方は、自分たちの前で本当に楽しそうに話されていました。伝えることも大切ですが、伝わるように楽しく話せば、３０分という面接も存分に楽しめると思います。

残り少ないですが、特別に何かを始めるのではなく、いつもと変わらずコツコツとがんばりましょう。

岡田　瑞季さん

（国際言語学部国際言語コミュニケーション学科 ４年生）

Never give up !

いよいよ教員採用試験（以下、教採）が間近に迫ってきました。去年は先輩たちを送り出してきた自分が、送り出される側に回るなんて。時が早いものです。さて、今回の羅針盤では間近に迫った教採に向けての取り組み、意気込みをこの場を借りてお伝えしていきたいと思います。

まず、私が小学校教師を目ざした理由を端的に述べたいと思います。私が外大に入学した理由は英語教師になるためでした。しかし、２回生の時に他大学に科目等履修生として行くことで、学研都市キャンパスでも小学校免許を取得出来ることを知りました。私は子どもたちが大好きで、教えることが大好きで、子どもたちと学校生活を授業だけではなく登校から下校まで

ずっと過ごしたいと思ったので、これを実現できるのは小学校教師だと思い、目ざし始めました。

次に教採に向けての取り組みについて述べたいと思います。私は教採に合格するためには 1.自分を信じること 2.仲間 3.メリハリをしっかりする、この 3 つが大切だと思います。そのためにはサイスペ・勉強合宿は最高の機会です。私は３回生の秋学期からサイスペに行き始めました。最初は先輩方の合格に対する熱意と能力がとても高く、後輩の私は引け目を感じていました。しかし、その時に西村先生から「今、出来ないのは当たり前。これから勉強して出来るところを増やしていったらいい」また先輩から「瑞季、わかってきとるで」「今の面接良かった」と声をかけていただき、私は今はこれで良いんだ。続けていくことが大切なんだと気づき、それからは毎週参加するようになりました。また、勉強合宿にも参加して先輩たちからたくさん学び、教師に対する憧れが増えて行きました。今、４回生になり同じ教師をめざす仲間と共に勉強に励んでいます。ラーニングコモンズは私たちサイスペメンバーの集合場所です。毎日集まって個々の勉強をしつつ、集中力が切れた時はパワーポイントで教職教養をみんなで解いたり、面接をしたりしています。誰かがつまずいたら、励ましあい、助け合って、集中するときは集中し、ふざけ合って笑い合う時は思いっきり笑ってとお互いに意欲を高め合う、最高の仲間です。

私はいつも『全員合格』『迷ったときはしんどいほう』『外大で教師を目指して良かった』この３つの言葉を心に抱いています。関西外国語大学は教師をめざす学生にとって最高の場所です。サイスペや勉強合宿など、教師をめざす私たちを手厚くサポートしてくれていることがとても嬉しく、機会を与えてくれている教職の先生方に感謝です。また、今共に合格を勝ち取るために頑張っている仲間がいることはとても大きいです。教採は一人では決して乗り越えられません。仲間がいるから頑張れる。一人で勉強をしていると、もう止めたい。早く終わりたい。とマイナスな感情を抱いてしまう時があります。でも、その時、サイスペメンバーの顔が浮かんできます。しんどいのはみんな一緒です。ここで諦めたらみんなと一緒に勉強してきた日々に意味がなくなります。そう思うとやる気が溢れてきて、みんなで笑顔で合格したいという気持ちが大きくなります。

最高の先生と、最高の仲間と『合格』を勝ち取りたいと思います。いや、勝ち取ります。

平田　瑞穂さん

（国際言語学部国際言語コミュニケーション学科 4 年生）

こんにちは、国際言語学部４年生の平田瑞穂と申します。

二日後に採用試験を控え、緊張しながらこの原稿を書いています。

私が教員採用試験に立ち向かうために、大きな支えになったことを紹介します。一つ目は、西村先生の存在です。西村先生は皆の意見を大切にし、いつも私たちのモチベーションを高め

てくれます。サイスペを週２回、採用試験前には先生の空いている時間を私たちの面接練習に充ててくれました。私たちのことを第一に考えてくれ、応援してくれている先生に、合格で感謝の気持ちを伝えたいです。

　私はすぐに人と比べてしまい、自信がありませんでした。しかし、西村先生の決めゼリフである“Don’t be afraid of making mistakes! Don’t compare with others! Believe yourself!” という言葉に励まされました。いつも不安になったらこの言葉を思い出します。採用試験でも自分を信じ、教師になりたい！という気持ちをぶつけてきます。

　二つ目は、共に頑張ってきた仲間です。私は３年生の８月から 12 月まで留学に行っていたので、教職教養の勉強をしておらず不安でした。なので帰国後すぐに一緒に勉強を始めました。面接が得意な子、問題を作ってくれる子、教職教養に強い子、みんなのいいところを出し合って高め合いました。面接練習ではビデオを撮って「ここを直したほうがいいよ！笑顔で言えてた！」など言い合いました。

　絶対に自分一人では勉強できなかったし、本当にここまで来られたのは、西村先生といつも一緒に励まし合った仲間のおかげです。みんなで今まで頑張ってきたので、全員で必ず合格したいです。

シリーズ⑨「心の窓を少し開いて！」

【若い先生の力で、教育改革を！】

　今、学校現場は大きな変革期にある。中でも教職員の入れ替えが激しい。団塊の世代の教師が大量退職し、若い教師が毎年たくさん採用される時代である。

　社会の変化も学校教育に影響を与える。少子化や高齢化は家庭や地域の教育力の低下を招かないかと懸念される。「学力・学習状況調査」結果分析からも学力形成と人間関係の希薄化が大きな課題になっているとの指摘がある。

　そのキーワードは「繋がり」。

　一般的に学力向上といえば、第一義的に教師の「授業の力量」があげられる。しかし、子どもの学力を規定する要因は、そう単純なものではない。教師がどんなに教材解釈を練り上げ、発問や板書に工夫をして授業に臨んでも子どもたちの学習意欲が高まらない場合がある。

　１つは、子どもの体の調子が悪い時。体調不良である。朝の目覚めや朝食や排便が不規則だと学校で元気が出ない。

　２つは、家庭に悩み事や心配事がある時だ。虐待やネグレクトの問題もある。

　３つは、学年学級集団など学校での人間関係がギクシャクし、友だちがいないで孤立している時などである。

　家庭環境が不安定で、地域との繋がりが弱く、不登校などで学校と疎遠だと毎日が楽

しくない。保護者の労働、疾病、福祉や地域コミュニティなどの問題も子どもの学力形成に絡む。

子どもの学びと育ちをしっかりサポートしていくためには、学校で一人ひとりを大事にしたきめ細やかな教育と、学校・家庭・地域の協働・連携（繋がり）が重要である。その担い手が、若い先生の存在だ。

教職経験の浅い教職員が増える中、「学校力」や「教員力」の向上が急務の課題である。

「学校力」は、①教育目標の共有、②校務分掌等の機能的な役割分担、③教職員間の仲間意識の醸成が重要な要素と考える。

「教員力」は、①「授業力」②「子ども理解力」③「保護者等対応力」と考える。これら３つの力を高めるために「わかる授業」づくりと「子どもの集団づくり」に重点的に取り組む必要がある。そのためには、若い先生を中心に保護者・地域の方々と一層連携を深め、「子どもの幸せのためになにが必要か」を考え取り組むことが求められる。

編集後記―――教職教育センターより―――

蝉の鳴き声も聞かれるようになり、梅雨明けを意識する頃となりました。夏本番到来です。

暑い季節の大きな課題は、やはり体調管理でしょうか。

夏バテは、冷房の効いた部屋と外の出入りや、身体を冷やす食べ物のとり過ぎなどが原因の自律神経の不調で起こります。

寒い部屋では、一枚余分に羽織ったり、しょうがなどの体を温める食べ物を積極的にとることが大切です。甘酒は冬のイメージがありますが、江戸時代には夏バテ防止として、栄養補給のために飲まれていたといいます。

積極的に夏バテ対策を取り入れ、体調管理をしましょう。